

サンゴをかじった魚

Fish that gnawed corals



植え付けたサンゴが何者かにかじられて困るという話を以前「みどりいし」に書いた(岩尾 2010)。その後、犯人探しの調査を行っている。2011年にはデジタルカメラのインターバル撮影機能を使って、植え付け直後のサンゴを30秒毎に6日間にわたって撮影した。写真は、まさにサンゴがかじられている瞬間だ。この時の犯人は、ハクセイハギ *Cantherhines dumerilii* だった。この魚がサンゴをかじることはこれまでにハワイや沖ノ鳥島からも報告があり、今回、阿嘉島でもその様子を何度も記録できた。その後観察したところでは、特に手酷くやられたのは植え付け直後のサンゴや台風などで壊されたサンゴだった。ストレスを受けたサンゴからは、この魚を誘うにおいでも出ているのだろうか。それを確かめる実験はこれからだ。

[文献：岩尾研二 (2010) サンゴをかじる魚。みどりいし (21): 34-37]

撮影：岩尾研二
撮影日：2011年12月21日
場所：マジャノハマ

編集後記

編集 岩尾研二 (研究員)

十数年前、沿岸海洋管理の専門家であるマイケル・クロスビー博士が沖縄での講演で、沿岸生態系の管理のためには管理者や政策立案者が研究者と一緒に管理のための科学的なプロジェクトや活動について話し合わなければならないということ、そして、科学的・技術的情報を科学者でない管理者や政策立案者や一般の人々に解釈して伝達する人たち(トランスレーター)の存在が大切であることを述べられています。保全のためには、関係者が共通の認識をもつための解説や教育啓発活動が重要であり、そして築かれた科学的な共通認識を基にして方針の決定がなされるべきであるということでしょう。今号に寄せられた清水麻記さんらの活動は、まさにそのトランスレーションの一例でしょうし、さんご礁の保全に取り組んでいる私たちに求められている役割の一つだと思います。そして、大森 信所長の記事にある「ノーテイク保護区」は、こうした仕組みを使って到達すべき保全の形の提案だと思います。今号にもさまざまな科学分野の記事を掲載することができました。これらの情報を活用した保全の道をこれからも考えて行きたいと思っています。



発行人
ESTABLISHMENT OF TROPICAL MARINE ECOLOGICAL RESEARCH

一般財団法人熱帯海洋生態研究振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ614号 TEL. 03-3490-7266 FAX. 03-3490-8278

AKAJIMA MARINE SCIENCE LABORATORY

阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179 TEL. 098-987-2304 FAX. 098-987-2875
E-mail: amsl@oki-zamami.jp Homepage URL: <http://www.amsl.or.jp>